



へへ。なんなら、

タムロンの中庭開きだろ

毎日欲望はびすまてやるー！

ぬい

はっ

はっ

「おや、妖狐さんお一人！」
これはこれはめずらしい客人だな！どうぞ座ってください。名前は何と呼べばいい？ご注文は？

「九輪でいい。清酒を頼む。」

「あそこの妖狐さん、身なりからして、ただものに見えないな……」

九輪が来てから、酒場は少し騒ぎになった。

しかし、この妖狐さんが無口で元気もなさそうだと分かったら、すぐ元の様子に戻った。

「聞いたか？南西の洞窟で最近また変な音がしたそうだ……」

「また魔物が住みついたかもしれん。」

「魔物があれば宝もある！討伐してみるか？」

「遠慮しとく。なるべく離れるようにするよ。」

「命を落としたくないからなあ……」

九輪さんは聞こえた。

「宝さえ手に入れば、酒をいくらでも飲める。」



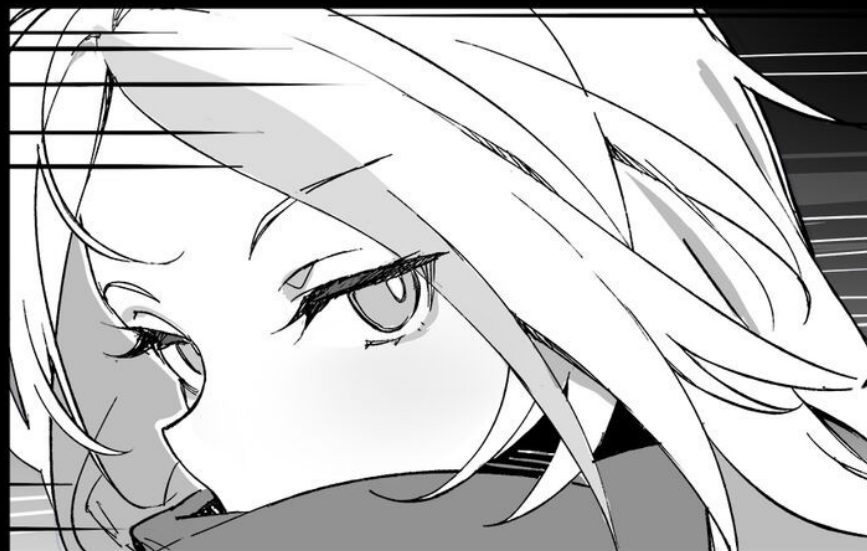
下らないダンジョンだ。
やっぱ帰って寝よう。



全く魔物の気配がないな。
あの人たち、
なにか間違っているんじゃないかな？



絶対「ド」に当たらない。
魔物の耳は聞こえない。



騙し討ちか？
おいお前が、
もうわかったからなまよって出ていけ。



お前らの欲望の匂いは気持ち悪すぎて、
ずっと遠くからわかってたのよ！
それに、その人数でやるつもり？
随分あたしを見送ってるじゃない。

全員まとめてかかってこい。
人間の分際であたしに勝てると思ふな。



さすが妖狐さま。
嗅覚がするといねえ。
これでも避けたとはな。



その煙は……

どこで手に入れたの？



——待って

は？わかってないのはあなたたちだろう？
ただの山賊のくせに、能力値は
人間の中でも弱い存在にすぎない……

普通なもの
じゃない……



うわ、こわ。
もしかして、
妖狐さまはまだ自分の立場が
分かっていないようだね？



おや？結構効いたじゃん
これはせうかく手に入れた
妖狐退治の秘薬だぜ。
効だけじゃだめだよ、
妖狐様よ。

卑劣な人間どもめ……
あ……あたしに近づくな！

さっき何と言ってたっけ？
その弱い人間は
今犯した来たんだぞマハハハ



(もう…ダメ…)



一発で絶頂させる！

よじ、



(ううう…「ほん」ほん、
もう息ができな…)

はっはっは、妖狐を犯したっ、
やっは感じ違うなー

こんなに興奮しやがって、
どんだけのビッチ狐なんだ！
大人しく俺様のザーメンを受け取れい！

へえ、首に絞められたら、
マンコも締まってくれる。

(深い…この姿勢では…
あたしは簡単に持ち上げられる…)

どうだ！この快感、味わったことなかったんだろ！
はっは、おまえみたくない小娘は、
オナホみたいに使われるべきだ！
「こういう運命だと認めればいいんだぞ！」

めっ

めっ

びゅん
びゅん
びゅん

A

(あたしは…オナホ？ダメだ、
もう思考ができない…
いく、またいつちやう)

(もうちんぽ以外、
何も考えられない…)

(毎日こんなに気持ちよくいけるなら…
オナホでも…いい…あたしの体は、
男たちの玩具だ)





うわ、さすがホス。乱暴しすぎだな。
まだ息してんのか？

そんなバカな。ちっちゃいけど、
妖狐の体は頑丈だ。
ちくちくじつても壊れない。

へへ。なんなら、
タマシヨンの手前ではさっさと
毎日夜這い回すまわしてやる！

(えへへ…
閉じ込められて男たちの
肉便器にされるのか…)



閉じられても抵抗をしない。
なんて淫乱な狐は！
自分も随分楽しんでんじやんかよ！

おいおい、俺らの足音を聞こえたら、
乳首も立ってんのかよ！

そその大きなちんぽでどうぞ、
あたしの体をきつく、
はげしく犯してください…

ははははー安心しろー！
毎日ちゃんとやってあげるよ？

「あの神々しい妖狐さん、郊外のダンジョンにいくっていったら、姿が見えなくなったよね！」
妖狐さんは、何かあったかな」

「でもあんなに強い妖狐さんのことだから、
ダンジョンを討伐するなんて簡単な仕事だと思っよ。
しかもあのダンジョンには魔物がもういないそっだぞ。」
妖狐さんが魔物をやっつけて、そして遠くに行ってしまったに決まっっている！」

「強者はみんなそっだった！」

.....

「九輪さんはいま、どこにいるだろっ？」

山賊

金銭に執着し、手段を選ばず、陰険で狡猾のドスケベな男たち。
山やダンジョンで待ち伏せをして、旅人を襲うのはその得意なところ……
先日襲った豪商の馬車の中から珍しい道具を見つけたようだ……

九輪

人間界を歩く妖狐。常人よりはるかに高い能力値を持つ。
自分の実力に絶対的な自信があり、
一般人とのやりとりを価値がないと思っている。
でも決して彼女には弱みがないというわけでもない……

